



チバイイ!
ケンチク 50

はじめに：「見築」ノススメ

大学の建築学科では「建築のつくり方」を勉強します。しかし、実際につくられる建築は、大学の教室にはなく、建てられたその場所にしかありません。建築を何のために学ぶかは十人十色でしょうが、大学の教室だけで学びが十分でないことは明白です。かの映画の名セリフにもありますよね、「建築は教室にあるんじゃない！現場にあるんだ！」…オリジナルのそれとはちょっと違いますが、要するにそういうコトです。

現地を実際に訪ねて、建築空間を自らの身体を通じて体感する「見築」という学びには、たくさんのヒントが詰まっています。建築計画から建築家の設計意図を眼で読み解き、建築材料の素材感や建築を取り巻く環境を肌で感じ、建物を構築している力の流れから建築構造を頭で理解するなどなど…もちろん大学の教室での学びも必要で、そこで理論を学び、その学びを実物を通じて実感することにこそ「見築」の意義があります。要するに講義と「見築」は相補関係にあって、古くから建築を学ぶ上で基本的な学習方法となってきました。様々な創意工夫をもって建てられてきた「名作」と呼ばれる建築の数々は、大学の講義で学ぶに等しい、またはそれ以上の多くを学ばせてくれる、まさに「活きた教科書」とも言えるものなのです。

国宝や国指定重要文化財などの著名な文化財建造物は京都・奈良など主に近畿地方に、現代建築の有名作品は東京や大阪など大都市に集中していますが、千葉県内の身近なところにもそれらに劣らない（それもここに取り上げた50作だけにとどまらない）大変に魅力的で優れた建築の数々があります。そこで歴史的な文化財からごく最近の近作となる現代建築まで50作をピックアップして紹介する冊子を作成しました。これは千葉県内に所在し、特に電車やバスなど公共交通機関を利用することで現地を訪ねて「見築」できることをポイントに（そのため千葉工業大学のある習志野市を中心に近郊のものが多くなっています）、藤木研究室のゼミ生を中心に選び、作成したものです。みなさまの新たな発見につながり、建築空間を体感して学ぶ「見築」の機会にお役立ていただけるものであったのなら、これほど嬉しいことはありません。

千葉工業大学 創造工学部 建築学科 藤木 竜也 ならびに 藤木研究室一同

ケンチクの見方・楽しみ方 - フジキ流「見築」指南

1. 到着までの道中も敏感に魅力的な建築や町並を探して寄り道しながら向かおう！
2. 到着したら外観全体を正面だけでなく、側面・背面にも回り込んで360度余すことなく見築しよう！
3. 建築に近づいて彫刻や装飾、構法や部材（構造部材や外装材など）などの細部に見てふれよう！
→ 建設のプロセスや構造を支える力の流れなどをイメージしながら「見築」できるようになると上級者。建築史の学術用語を知っておくと理解度がさらに深まります。
4. 内部では壁・床・天井の材料、光の採り入れ方、音の響き、高さや奥行の関係から生じる空間性、庭園（外部空間）の見え方を部屋・空間ごとに体感しよう！
5. 別の建築と比べた時に見られる共通点や相違点を年代差を踏まえつつ、その建築に受け継がれている本質やこの建築に独自に生じている特質を整理して理解しよう！
6. 目で見て、肌で感じた印象深いことや別の建築との比較で重要と感じたことをキーワードでまとめよう！
→ 自分でない誰かに建築の魅力や特色を伝えるなど、アウトプットする上で言語化しておくことが重要なプロセスです。そのためには学術用語が必要になりますので、やっぱりそれなりに勉強は必要ということになりますね。

- 1867

- 01 飯香岡八幡宮
- 02 笠森寺観音堂
- 03 法華経寺五重塔
- 04 法華経寺祖師堂
- 05 旧大沢家住宅
- 06 香取神宮
- 07 成田山新勝寺光明堂
- 08 成田山新勝寺釈迦堂
- 09 伊能忠敬旧宅
- 10 旧河原家住宅
- 11 旧吉田家住宅
- 12 中村屋商店

1868 - 1945

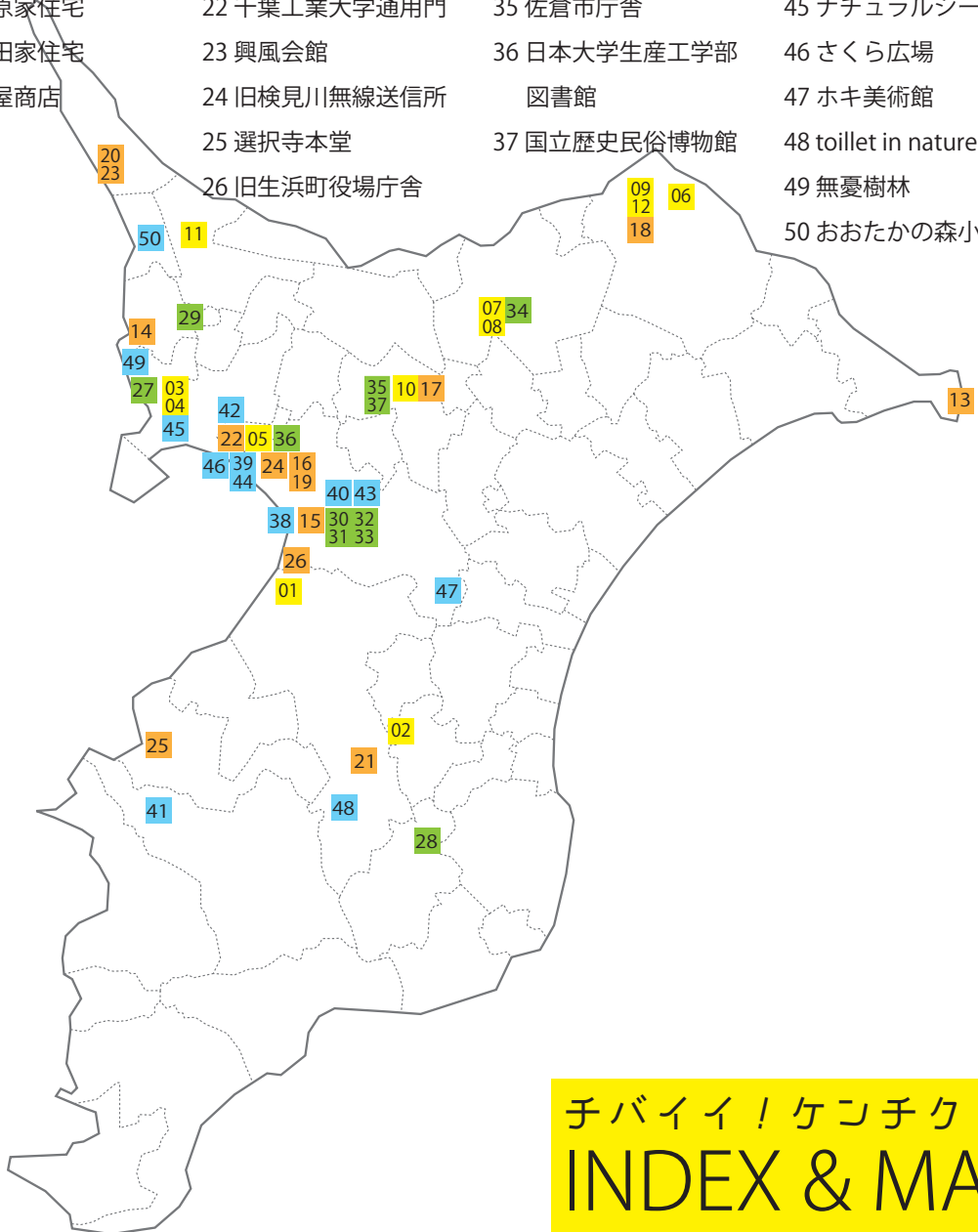
- 13 犬吠埼灯台
- 14 旧徳川家松戸定邸
- 15 千葉教会教会堂
- 16 千葉トヨペット本社
- 17 佐倉高等学校記念館
- 18 旧三菱銀行佐原支店
- 19 旧神谷伝兵衛稲毛別荘
- 20 旧茂木佐平治邸
- 21 上総鶴舞駅
- 22 千葉工業大学通用門
- 23 興風会館
- 24 旧検見川無線送信所
- 25 選択寺本堂
- 26 旧生浜町役場庁舎

1946 - 1980

- 27 日本福音ルーテル
市川教会
- 28 大多喜町役場中庁舎
- 29 常盤平団地
- 30 千葉大学記念講堂
- 31 千葉市立郷土博物館
- 32 千葉県文化会館
- 33 千葉県立中央図書館
- 34 成田山新勝寺大本堂
- 35 佐倉市庁舎
- 36 日本大学生産工学部
図書館
- 37 国立歴史民俗博物館

1981 -

- 38 千葉ポートタワー
- 39 幕張メッセ
- 40 千葉神社社殿
- 41 君津市民文化ホール
- 42 YKK 津田沼
セミナーハウス
- 43 千葉市中央区役所・
千葉市美術館
- 44 千葉市立打瀬小学校
- 45 ナチュラルシーム
- 46 さくら広場
- 47 ホキ美術館
- 48 toilet in nature
- 49 無憂樹林
- 50 おおたかの森小・中学校



チバイイ！ケンチク 50
INDEX & MAP

No.

建築写真

建築の紹介文 …

チバイイ！ケンチク 50 建築紹介の凡例

…（紹介文の記入者）

参考文献：文献やホームページなど参考資料を記入

[建築名称]

住所 … 建築の所在地
建立 … 建築の建設年代
設計 … 建築の設計者
施工 … 建築の施工者

01



飯香岡八幡宮

住所：市原市 八幡 1057-1
建立：[本殿] 室町時代末期
[拝殿] 元禄 4 (1691) 年
設計：不詳
施工：不詳

白鳳年間 (645-710) に一國一社の八幡宮として勸請されたことを起源にもち、後には国府八幡宮に並べられ、さらには上総総社としての役割も兼ねた上総国を代表する古社の 1 つである。現在は埋立により面影が失われてしまったが、社殿はかつての海岸線沿いに西面して鎮座している。千葉県指定文化財である拝殿は元禄 4 (1691) 年に建立された入母屋造の横拝殿形式で、正面中央に千鳥破風を置き、向拝には軒唐破風を併せ持つ華やかな造りである。全体的に控えめな意匠だが、墓股の彫刻や虹梁に刻まれた絵様に江戸期特有の建築意匠を見て取れる。

一方、本殿は拝殿より古く、室町時代後期の建立とされ、県内では最古の神社建築として国指定重要文化財に指定されている。建築は正面 3 間、側面 2 間の入母屋造平入の形式で正面に庇を大きく張り出して 1 間分の外陣を下部に収めている。建築は全体的に丹塗がなされ、彫刻・彩色はほとんど見出せない中世の神社建築に特有の簡素な意匠でまとめられている。(藤木 竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

02



笠森寺観音堂

住所：長生郡長南町笠森 302
建立：桃山時代
設計：不詳
施工：不詳

延暦 3 (784) 年に伝教大師・最澄が楠の霊木で十一面観音菩薩を刻み、山上に安置して開基されたと伝わる古刹で、通称「笠森観音」と呼ばれている。

現在、本尊を安置しているのが観音堂で、これは後一条天皇の勅願で長元元年 (1028) 年の建立と伝えられてきたが、戦後の保存修理の際に天正・文禄年間 (1573-1595) の墨書の痕跡が見出され、桃山時代に建立されたことが判明している。

大岩の上に 61 本の長大な束柱を立て、遊具のジャングルジムのように貫で柱下を固め、床全面を中空に掲げた「四方懸造」という国内唯一の特異な建築形式をもつものとして国指定重要文化財に列せられている。全体的に装飾は控えめで、ダイナミックな架構の美しさと大胆な空間演出こそが最大の特徴と言えるだろう。

長南町の人里離れた山間の地にあり、バスの本数も少なく、アクセスは極めて不便であるが、一見の価値ある建築である。(藤木 竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

03



法華経寺五重塔

住所：市川市中山 2-10-1

建立：元和 8 (1622) 年

設計：不詳

施工：不詳

五重塔は本阿弥光室が両親の菩提を弔うために加賀藩主の一族である前田利光の援助を受けて建立したもので、本門寺や旧寛永寺の五重塔とほぼ同じ規模だが、他の塔と比べると軒の出が少ないため、特に細長い印象を受ける塔である。建築様式はおおむね和様で造られているが、最上層のみは禅宗様となっている。これは明治 45 (1912) 年に半解体修理が行われた時に変更されたと考えられている。また、昭和 55 (1980) 年にも修理が行われ、外部に弁柄塗りが施されて現在の姿となった。

各層の軒の組物に和様三手先を用い、中備は葦束とし、垂木の配置は五層目のみに唐様の扇垂木を用い、その他は平行垂木としている。屋根は銅板瓦棒葺で、2 層以上は縁を廻らし手すりがついているが、初層は手すりがなく、4 面とも中央に棧唐戸があり、両脇に連子窓を持つ。また、柱の上部や組物には美しい彩色模様がある。2 層目から上は階をなさず、外から見えない部分には装飾を加えない野仕上げのまま構造材が入り組んで見える。(斎藤 令)

参考文献：総覧日本の建築 第 2 巻、市川市ホームページ

04



法華経寺祖師堂

住所：市川市中山 2-10-1

建立：延宝 6 (1678) 年

設計：不詳

施工：不詳

宗祖日蓮聖人を祀る堂で、もともとは鎌倉時代の正中 2 (1325) 年に上棟した小規模な 5 間堂であったが、焼失などのため幾度か再建があり、現在の祖師堂は江戸時代中期の延宝 6 (1678) 年に建立された。大きな 7 間堂で屋根を 2 つ並べたような比翼入母屋造 (ひよくいりもやづくり) が特徴で、法華経寺祖師堂以外で比翼入母屋造の屋根をもつのは岡山県にある吉備津神社本殿だけである。

祖師堂は関東地方では数少ない大型日蓮宗仏堂の典型で、規模や形式は当時の庶民信仰の動向を知る上で大切とされており、建立年代が明確な建造物としても重要だ。堂内は正面の吹き放し外陣、内部の広い内陣、それに両脇の脇陣と背面の後陣からなり、内外陣境は上部に揚格子、下方に取り外し可能な結界を入れ、また内脇陣境にも同様な結界を入れ、大きな行事の際にはこれらを開け放って広く使うことができる。天井は一面の格天井で、格縁は黒漆塗、天井板には桔梗紋が描かれている。内陣周りの上部には極彩色塗りで、荘厳な雰囲気をつたえている。(斎藤 令)

参考文献：総覧日本の建築 第 2 巻、市川市ホームページ

05



旧大沢家住宅

住所：習志野市藤崎 1-14-43 森林公園内

建立：寛文 4 (1664) 年

設計：不詳

施工：不詳

江戸時代に上総国長柄郡宮成村 (現・千葉県長生郡長生村) の名主を務めた大沢家の主屋である。これは東日本では最古級の農家建築であり、千葉県指定文化財の指定を受けている。

昭和 48 (1973) 年までは同家の住まいとして用いられていたが、昭和 51 (1976) 年に習志野市藤崎の森林公園内に創建当初の状態に復原して移築し、以降一般に公開されている。

棟を竹簧巻にした茅葺屋根の寄棟造で、正面から左側にかけて幅半間分を土庇として縁は備えていない。平面構成は、古式を伝える広間型三間取を下地とした鍵折れの広間型五間取とする。このほか中央板間の「デイ」の戸口が格子窓と壁のみで構成され、挿鴨居が少なく、大黒柱もない上に床の間などの座敷飾も設けていないことも建築史上の古さを顕著に伝える点であり、江戸時代中期までの典型的な房総半島の古民家形式を伝える遺構として知られるものである。(藤木 竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

06



香取神宮

住所：香取市香取 1697
 建立：元禄 13 (1700) 年
 棟梁：小管長右衛門など
 施工：同上

式内社で下総国一宮となってきた、全国でも有数の古社として知られる全国の香取神社の総本社である。「亀甲山」と呼ばれる丘に境内が築かれ、南面して 1700 (元禄 13) 年に造営された 3 間 1 戸の楼門を構える。社殿はその奥に鎮座し、これは拝殿・幣殿・本殿から成る権現造の形式を持つ。本殿は楼門と同じ 1700 (元禄 13) 年建立の 3 間社流造で江戸期特有の彩色・彫刻を纏った華やかな意匠を持つものである。

一方、拝殿・幣殿は本殿に比べてずっと新しく、昭和の大改修に合わせて 1940 (昭和 15) 年に建てられたものである。檜皮葺の入母屋造平入形式とし、正面に千鳥破風と唐破風を載せた向拝を構える端正な佇まいで、黒漆塗の美しい軸部と華やかな彩色を纏う優れた技巧による本殿と比べても遜色のない近代社殿である。東隣に立つ祈祷殿が元々の拝殿で、本殿・楼門と同じ 1700 (元禄 13) 年の建立である。入母屋造平入の建築で、軸部を丹塗とし、虹梁の渦・若葉の絵様や彩色された木鼻の象の彫刻に当時の流行が垣間見られる。(藤木 竜也)

07



成田山新勝寺光明堂

住所：成田市成田 1
 建立：元禄 14 (1701) 年
 棟梁：石井又左衛門家次
 施工：同上

成田山新勝寺は、平将門の乱に際し、調伏の儀のために遣わされた寛朝僧正が 940 (天慶 3) 年に開いた古刹である。境内は参道を進んだ先の台地上に築かれており、光明堂は大本堂の裏手にある階段を昇じた先の比較的奥まった所に置かれている。これは 1701 (元禄 14) 年に建立され、今は愛染明王・不動明王・大日如来を祀るが、元々は境外の薬師堂 (1655 年) に次いで本堂となっていた御堂で、釈迦堂 (1858 年)、大本堂 (1968 年) と引き継がれて現在に至っている。

光明堂は 5 間四方で二軒平行繁垂木の入母屋造とする和様を主としたものだが、三手先組物の詰組として礎盤・台輪を細部に採り入れた禅宗様の特徴が認められるもので、また、棧唐戸の使用からもうゆる折衷様の意匠を持つものといえる。前面 2 間を吹き放ちの土間とする珍しい形とするが、これは安政年間の移築時に改められたものであるという。軸部の丹塗に加えて、彫刻欄間や中備の彫刻、柱上端の木鼻など、白を基調とした精緻な彫刻に江戸時代中期の近世社寺ならではの特徴をよく示している。(藤木 竜也)

08



成田山新勝寺釈迦堂

住所：成田市成田 1
 建立：安政 5 (1858) 年
 設計：染谷惟栄
 施工：同上

釈迦堂は大本堂左手の広場に建つ入母屋造の仏堂で、現在の大本堂が建立されるまでの本堂であり、江戸時代後期建築の特色をよく残した総檜造りの建築である。光明堂と大きく違うのは総檜の素木造りで、扉や欄間などに大きく精緻な彫刻を付けていることである。堂の周囲には二十四孝と五百羅漢の浮彫が施されており、特に五百羅漢の彫刻は仏師・松本良山が 10 年かけて彫り上げた大傑作で、五百人もの仏道の修行者である羅漢の姿はどれ 1 つ似ることはない。喜怒哀楽豊かな表情は人間味があり、ユーモラスで生き生きとした姿はこの彫刻たちの最大の魅力で、この中から自分や知人に似た顔を見つけることができると言われる。写真のない時代には、参詣者は亡き人の面影によく似た羅漢にまるで本人と再会したような感激を覚え懐かしんでいたという。実際に成田市のある地区では葬儀の後に釈迦堂を参詣して五百羅漢を拝し、亡き人を偲ぶ風習が昭和後期まで続いていたと言われている。(斎藤 令)

参考文献：総覧日本の建築 第 2 巻、成田市観光協会オフィシャルサイト

09



伊能忠敬旧宅

住所：香取市佐原イ 1899

建立：[店舗] 宝暦 12 (1762) 年以前

[書院] 寛政 5 (1793) 年

設計：[書院] 伊能忠敬

施工：不詳

日本最初の測量地図である「大日本沿海輿地全図」を完成させ、まだ誰も知る事のなかった日本列島という国土の形を目に見えるようにした歴史的偉業をもつのが伊能忠敬である。

伊能忠敬旧宅は伊能忠敬が 17 歳で婿養子として同家に入り、50 歳で江戸に出るまでの 33 年間に暮らした住まいである。伊能家は佐原で酒造業や米穀売買業などを営む有力な商家で、小野川に面して片脇に門を備えた切妻造平入形式の店舗を置いていた。これは伊能忠敬が当家に入るより前に構えられていたといい、酒造業で用いていた土蔵を改装したという全国的にも珍しい町家である。

背面には台所を介して書院を備えており、これは伊能忠敬が 48 歳の時に自ら設計したものとされ、玄関を設け、続き間となる客座敷を持つ武家住宅に近い平面構成であった。また、小野川より引いた農業用水が敷地内を流れており、それに張り出すように居室も設けて全体的には開放的な造りとなっている。さらに敷地後方には文政 4 (1821) 年の修理銘が残る土蔵が現存している。(藤木 竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

10



旧河原家住宅

住所：佐倉市宮小路町 57

建立：江戸時代後期

設計：不詳

施工：不詳

佐倉藩の武家町の面影を伝える鑄木小路に残る武家住宅の 1 つで、旧但馬家住宅ならびに旧武居家住宅と 3 棟並んで一体的に一般公開されている。

旧河原家住宅はの中で最も建築年代が古く、かつ佐倉藩で敷かれていた「天保の御制」における 300 石以上の大屋敷にあたる家格も高い上級の武家住宅の遺構である。

外観は腰壁を彫り下見板張とした真壁の造りで、竹簧巻の棟に茅葺屋根とした素朴な建築であるが、南側を玄関・取次の間とし、長押を回して床の間を設えた客座敷をそれに連ねて「接客系領域」をなし、北側を居間と茶の間、武家住宅らしい土間の狭い台所などの「居住系領域」として、内部造作と共に平面構成を 2 分する武家住宅の特徴を備えた好例である。

台所に接して湯殿（風呂）が置かれているが、室内から行き来できず、外部から立ち入る動線を持つ。これは屋根が独立した形状となって接続していることから増築と見られる。(藤木 竜也)

参考文献：佐倉市教育委員会作成武家屋敷パンフレット

11



旧吉田家住宅

住所：柏市花野井字原 974-1

建立：[長屋門] 天保 2 (1831) 年

[主屋] 嘉永 6 (1853) 年ほか

設計：不詳

施工：不詳

吉田家は古く平安時代の頃より当地に土着していた豪農で、江戸時代後期には醤油醸造を営む商家の顔と、幕府の軍馬育成を行った小金牧の管理を担う牧士としての武家の顔を併せ持っていた県内屈指の名家である。

邸内建物は、長屋門 (1831 年)、新蔵・向蔵 (1833 年)、主屋・書院 (1853 年)、新座敷 (1865 年) と天保年間から幕末にかけて整えられたものである。特に主屋は玄関と仏間を 2 室に隔てるが、四つ間取りを基本平面とし、下手には大きな土間を備えて農家特有の設えを持つ。土間に接してオモテ側はミセであり、主人の執務室も増築して商家としての機能を併せ持っていた。玄関から渡廊下を通じて別棟の書院があり、ここは純度の高い武家住宅の造りである。家格そのままを表すように主屋もまた 3 つの顔を併せ持つ類稀な建築である。県内の古民家での文化財は移築復原される例が多い中で、主屋を中心に附属建物が一体的に守り伝えられ、屋敷景観が良好に維持されてきたことは関東近郊の柏の地にあつて奇跡といえる。(藤木 竜也)

参考文献：旧吉田家住宅歴史公園パンフレット

12



中村屋商店

住所：佐原市佐原イ 1720

建立：[店舗] 安政 2 (1855) 年
[土蔵] 明治 25 (1892) 年

設計：不詳

施工：不詳

代々荒物や雑貨などを商ってきた商家で、佐原の歴史的町並の中心となる香取街道と小野川の交わる角地に立地する。

主屋は小野川に面して東向きに建てられた寄棟造平入の形式である。角地にあることからガラス引戸を正面だけでなく街道側の北面にも入れて開放的な造りとしている。1階内部には揚戸を建て込み、外部の土庇を格子戸と壁で囲う形として、2階正面には繊細な格子窓を組み、軒下を張り出して「せがい造り」とするなど格式のある建築としている。2階の高欄には「中村屋商店」という店名と屋号が掲げられるが、これを隅切とすることで本来は厳然とした矩形の建築であるにも関わらず、角地に向けても正面性を持つ良いアクセントとなっている。

また、主屋南側に隣接して3階建の袖蔵がある。これは明治 25 (1892) 年の大火後に建設されたもので、一見するとわからないが、敷地形状に合わせて変形の切妻屋根とし、内部間取も変形平面の部屋を設けるなど種々の工夫を凝らしたものとなっている。(藤木 竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

13



犬吠埼灯台

住所：銚子市犬吠埼

建立：明治 7 (1874) 年

設計：R.H. ブラントン

施工：不詳

銚子半島の最東端に位置する犬吠埼灯台は、明治 7 (1874) 年 11 月 15 日に竣工され、平成 26 (2014) 年で初点灯から 140 周年を迎えた。工事費用は、当時の金額で 44,835 円 63 銭であった(現在の金額に換算するとおおよそ 4 億円)。

建物高さは 31.5m で、日本におけるレンガ造建築のうち 2 番目の高さである。灯台内部の階段は、所在地の九十九里浜にちなんで、99 段になっている。

国産のレンガを 19 万 3 千枚使用した真っ白な外観を持つこの灯台は、銚子市のシンボリック存在であると同時に近代建築の遺産としても大変貴重な建物だ。

犬吠埼灯台が照らすことのできる距離は、おおよそ 19.5 海里(約 35km) ほどだという。船舶が安全に航行できるよう、明るく照らし続けるほか、船舶気象や人工衛星(GPS)の誤差などの重大な情報を扱うことも現在の犬吠埼灯台の業務となっている。(久喜 有乃)

参考文献：銚子市観光協会 HP、海上保安庁 HP、犬吠埼ブラントン会 HP

14



旧徳川家松戸戸定邸

住所：松戸市松戸 642-1

建立：明治 17 (1884) 年

設計：不詳

施工：不詳

徳川 15 代最後の将軍であった徳川慶喜の弟であり、自身も水戸藩最後の藩主となった徳川昭武が明治 17 (1884) 年に JR 松戸駅南側の高台に造った広大な和風住宅である。

建築は木造平屋一部 2 階建てで、表座敷棟をはじめ 8 つの棟が連結し、複雑に構成された平面構成を持つと共に瓦屋根を載せた近世上流武家住宅の名残を残す。一方で、床柱や落し掛けなど座敷飾にふんだんに銘木を用い、背の低い洗面台を設け、タイル張りの浴槽に杉板網代組の天井を持つ浴室とするなど、近世までの伝統的な住宅建築には見ることのなかった近代的な要素を併せ持っており、明治期の近世上流階級住宅の好例として国指定重要文化財に指定されている。

庭園は住宅間近まで続く全面的に毛足の長い芝庭としており、深緑の頃には、まるで「緑の海」のような美しいものである。芝庭もまた江戸時代までには一般的でなかったもので、とりわけ旧徳川家松戸戸定邸は洋風庭園の技法を採り入れた最古のものとして高い学術的価値が認められている。(藤木 竜也)

参考文献：戸定歴史館ホームページ

15



千葉教会教会堂

住所：千葉市中央区市場町 9-20

建立：明治 28 (1895) 年

設計：リヒャルト・ゼール

施工：不詳

千葉教会の教会堂は、ドイツ人建築士リヒャルト・ゼールが、元々三田美以教会の教会堂のために作った設計図を左右反転した形で施工したもので、完成は明治 28 (1895) 年である。この教会堂は、尖塔・鐘楼をもって天を高く目指し、縦長の大窓から光を取り入れて天国の明るさを写すというゴシック様式に従っている。大窓上部の装飾もゴシック様式に特有なものであるが、さらにハンマービームと言われる木造ゴシック建築ならではの工法を採ることも特徴である。これは建物の横幅を広げ、天井を高くするため、建物の両側から内側に向かって梁を突き出し、その先端部分に束を立てて天井を支えるとともに、この梁を下からアーチ型の材で支えるというものである。明治 44 (1911) 年に台風で尖塔・鐘楼が倒壊し、大正 12 (1923) 年の関東大震災でも壁の一部が剥落したが、幸い第二次世界大戦の空襲による被害は免れ、昭和 50 (1975) 年に千葉県有形文化財に指定された。(梅原 克幸)

参考文献：千葉教会ホームページ

16



千葉トヨペット本社 (旧勸業銀行本店)

住所：千葉市美浜区稲毛海岸 4-5-1

建立：明治 32 (1899) 年

設計：妻木頼黄・武田五一

施工：不詳

元々は明治 32 (1899) 年に東京・日比谷に旧日本勸業銀行本店として建築されたものである。その後何度かの移転を経て、昭和 40 (1965) 年に現在地へと移った。

構造は木造 2 階建てで、全体の形状は左右に長く伸び、寺社建築にも用いられる唐破風（からはふー中央を盛り上げ、左右端を上部に持ち上げた、波打ったような形状の屋根装飾）を中央玄関に使用した和風の意匠を持つ。平成 9 (1997) 年 7 月には、国登録有形文化財にも登録されている。

設計は妻木頼黄と武田五一の共同で行われた。妻木頼黄は、横浜新湊埠頭倉庫（現・赤レンガ倉庫）などを手掛けた、明治時代を代表する建築家で、武田五一は古建築修復に造詣が深だけでなく、ヨーロッパで培った新しい建築様式を広く日本に知らしめた建築家であった。当時の建築家にとっては様式建築をどう受容するかが大きな関心事となる全盛の頃であり、そうした中で和風意匠を採り入れることを試みた意欲作といえる。(久喜 有乃+藤木竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

17



佐倉高等学校記念館 (旧佐倉中学校本館)

住所：佐倉市鍋山町 18

建立：明治 43 (1910) 年

設計：久野節、後藤政二郎

施工：島崎留次郎

始まりは寛政 4 (1792) 年、佐倉藩の学問所が前身である。教育熱心な旧藩主・堀田家の財政援助により、その後の経営が支えられていた。明治 43 (1910) 年、佐倉藩最後の藩主、堀田正倫の援助によって記念館が建設される。設計は後の鉄道省初代建築課長となる久野節と後藤政二郎である。本館は明治から使用されている木造校舎で、建築家・建築史家の伊東忠太、元プロ野球選手の長嶋茂雄など多くの著名人が卒業生として名を残している。構造は木造 2 階建てで、外観は明治後期の洋風学校建築に用いられた特徴をよく残している。玄関の桜の花びら模様を持つ車寄せを中心とした左右対称の構造や、鉄棒のような飾りを持つドーム屋根、窓の上部にはペディメント（日本建築の破風にあたるもの）がバランスよく配置されている。また、基礎には煉瓦が用いられているが、覆輪目地によって煉瓦の美しさが際立っている。その他に校舎を開放的に魅せる連続した縦長の上げ下げ窓、水平を強調したドイツ下見板による外壁などがある。近代化を推し進め西洋化を計った日本の中で、日本人が『洋風』をどの様に捉えたかを知ることが出来る。(岡澤 甫)

18



旧三菱銀行佐原支店 (現・佐原三菱館)

住所：香取市佐原イ 1903-1
 建立：大正 3 (1914) 年
 設計：清水組
 施工：清水組

香取街道沿いにあるレンガ造建築。大正 3 (1914) 年に川崎第百銀行佐原支店として建てられた。だが、昭和 18 (1943) 年に三菱銀行に吸収合併され、三菱銀行佐原支店となった。その後、平成元 (1989) 年に新店舗が完成したことから、本館は寄贈されることとなった。保存されていた設計図によると、清水満之助本店技術部 (清水組、後の清水建設) によって設計されたものである。本館は 2 階建で内部に吹抜けが設けられているほか、2 階周囲には回廊がある。屋根は木骨で銅板葺きとなっている。正面の入口の上にはドームが付いているなど、明治の洋風煉瓦造を受け継ぐ意匠的に優れた建物となっている。建物全体のデザインはルネサンス様式 (古典主義) で、レンガと花崗岩で形作られた特徴的な建物となっている。当初の規模は、本館と金庫室およびそれをつなぐ廊下からなっていたが、現在は本館左右に平屋建の建物が増築されている (昭和 19 年および 30 年)。その他には、正面入口の庇が道路拡幅のために改造されているが、本館主要部分は当時の姿を残している。(岡澤 甫)

参考文献：総覧日本の建築 第 2 巻、千葉県教育委員会ホームページ

19



旧神谷伝兵衛稲毛別荘 (千葉市民ギャラリー・いなげ)

住所：千葉市稲毛区稲毛 1-8-35
 建立：大正 7 (1916) 年
 設計：不詳
 施工：不詳

東京・浅草で洋酒を普及させ、また、本格的なフランスワインの醸造技術を導入したことで知られる、明治・大正時代の実業家・初代神谷伝兵衛の別荘だったものがこの建物だ。大正 7 (1916) 年の建築であり、鉄筋コンクリート造の建築物としては千葉市内で最も古く、全国的に見ても初期のものである。

1 階正面にはロマネスク様式 (初期のヨーロッパ建築) 風の 5 連アーチが並ぶ吹き放ちの柱廊が配置され、2 階は非対称になった変化のある外観で構成されており、建物全体の外壁は白色タイルで仕上げられている。建物内部は、1 階が本格的な洋室であるのに対して、2 階は和室となっており、面白い変化を感じられる。内部の装飾をみると、玄関天井のシャンデリアの中心飾りが葡萄のモチーフとなっていることや、2 階の床柱に葡萄の巨木を用い、天井を竹格子で組んで部屋全体を葡萄棚に見立てて仕上げているなど、ワイン王といわれた神谷伝兵衛ならではの意匠が随所に施されており、必見である。(梅原 克幸)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

20



旧茂木佐平治邸 (野田市市民会館)

住所：野田市野田 370-8
 建立：大正 13 (1924) 年
 設計：不詳
 施工：不詳

企業城下町・野田の醤油産業を支えた野田醤油株式会社 (現・キッコーマン株式会社) の創業者の 1 人・茂木佐平治邸として大正 13 (1924) 年に建設された。昭和 31 (1956) 年に寄贈され、野田市市民会館となって今に至っており、市民が多目的に使用する公民館施設として活用されつつ大切に守られてきた保存活用事例としても好例で、平成 9 (1997) 年には登録文化財に登録されている。

明治時代以降に欧米の建築様式や最新の建築技術を取り入れて建てられたものを近代和風建築と呼ぶが、本宅でも従前の和風住宅には見られない廊下に並べられた豪華な照明器具やシャワーを備えた浴室、床下収納を持つ台所、寄木張りの床を持った広い洗面所などが採り入れられており、接客空間だけでなく生活空間にまで神経が緻密に行き届いた完成度の高い住宅建築となっている。

芝庭と池泉から構成される庭園も素晴らしく、また 4 畳半と中柱を持つ 2 畳台目からなる「松樹庵」と号された茶室もある。千葉県内では珍しく茶室の見学が出来るスポットである。(藤木 竜也)

参考文献：茂木佐平治邸物語 (野田市市民会館パンフレット)

21



小湊鉄道 上総鶴舞駅

住所：市原市池和田 898-2

建立：大正 14 (1925) 年

設計：不詳

施工：不詳

小湊鉄道は市原市の五井駅から大多喜町の上総中野駅まで、凡そ養老川に沿って敷かれた 39.1km に及ぶ私鉄路線である。これは陸軍鉄道連隊の敷設訓練の一環として、当初外房の安房郡小湊町まで房総半島を横断する計画であったが、1925 (大正 14) 年に五井駅 - 里見駅の開業に始まり、2 度の延伸を経て 1928 (昭和 3) 年に上総中野駅まで開業したところで資金難等から現在の形となった。

中でも上総鶴舞駅は、1925 (大正 14) 年創業時の駅舎が良好に保存されたものである。アメリカ式下見板張で覆い、棧瓦葺の寄棟屋根を載せた小じんまりとした可愛らしいたたずまいで、正面・背面に柱を並べて庇をかけ渡していることが外観の意匠にまとまりを添えるものとしている。平面構成は左右の待合室と駅事務室を雁行した壁面で 2 分して待合室への張出部を改札窓口としており、国鉄の標準駅舎との共通性が認められる。

上総鶴舞駅をはじめとして、小湊鉄道は創業時からの駅舎・橋梁・隧道が現役で使用され、さらに保存状態も極めて良好なことから千葉県を代表する近代化遺産となるものである。(藤木 竜也)

22



千葉工業大学通用門 (旧鉄道第二聯隊表門)

住所：習志野市津田沼 2-17-1

建立：明治 40 (1907) 年

設計：不詳

施工：不詳

千葉工業大学津田沼校舎の北西側に裏門のようにひっそりとたたずむ赤レンガの門柱を持つ門がある。現在の正門が 1980 年代に出来るまでは長らく正門としての役割を担ってきたが、それよりも前は、戦地での物資・人員輸送のために鉄道敷設の任にあたった鉄道第二聯隊の兵舎が築かれており、その表門として用いられてきたという由緒あるものである。古くは兵舎を学舎として転用して始まった津田沼校舎であるが、今では鉄道第二聯隊の面影を伝える唯一の遺構として大切に守られている。

門柱は計 4 本、躯体をなす赤レンガを外装に露わしとし、レンガの長手面を見せて積んだ列と小口面を積んだ列とで交互に積み重ねるイギリス積とする。

門扉は中央が広く観音開きとし、左右両側を片開きとした木製扉としているが、これは 1998 (平成 10) 年に登録有形文化財に登録されたことを機に、古写真よりかつてのたたずまいを再現したものである。(藤木 竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

23



興風会館

住所：野田市野田 250

建立：昭和 4 (1929) 年

設計：大森茂

施工：戸田組 (現・戸田建設)

野田醤油株式会社 (現・キッコーマン株式会社) が、地域への社会貢献事業を推進するため昭和 3 (1928) 年に興風会を設立し、その翌年に事業運営を行うために建設したのが興風会館である。

明治大学の駿河台旧校舎や旧細川侯爵邸などで知られる大森茂の設計による「ロマネスクを加味した近世復興式」とされるものだが、全体はロマネスク様式に加えてドイツ表現主義やアール・デコも加味した当時流行の建築様式でまとめられている。

建築は鉄筋コンクリート造 4 階地下 1 階建てで、狭い間口に対して高さのある建築で、竣工当時には千葉県庁舎に次ぐ大建築であったといわれている。内部は 2 ~ 4 階までを吹抜とした 652 席の収容人数を誇る大講堂を中心に据えて、さらに会議室や和室などから構成されている。インテリアには、テラゾ (人造石) を多用し、いかにも昭和戦前期らしい特徴を備えている。内外共に純度高く創建時のたたずまいが保存されており、1997 (平成 9) 年には登録文化財に登録された。(藤木 竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ



旧検見川無線送信所

住所：千葉市花見川区検見川町 5-2069

建立：大正 15 (1926) 年

設計：逓信省宮繕課 (吉田鉄郎)

施工：深川近藤組

JR 新検見川駅の南方、新しい住宅街の中に捨て去られた廃墟のごとき建築がある。これは対外国通信を行う施設として使用され、特に日本で初めて短波による標準電波の送信を行った検見川無線送信所の局舎で、大正 15 (1926) 年に建設された。設計は、郵便と電話を管轄する逓信省に建築技師として所属していた吉田鉄郎で、建築は鉄筋コンクリート造 2 階建である。

全体の形状は T 字型のプランで、2 階に設けられたエントランスにアプローチするための二手に分かれた階段がアクセントになっているものの、全体的には一見すると簡素なデザインに映る。しかし、建築の角を全て丸めてコンクリートの持つ自由な可塑性を活かした造形は、表現主義の影響によって生み出されたもので、自覚的かつ意図的に無装飾という装飾を纏わせたものである。

一時中学校用地となり解体の危機に及んだが、保存活動の働きかけで保存されることとなった。今しばらくは外観のみしか見学ができないが、近い将来に保存再生がなされ、広く活用されていくことを楽しみにしたい。(藤木 竜也)



選択寺本堂

住所：木更津市中央 1-5-6

建立：昭和 5 (1930) 年

設計：不詳

施工：不詳

上総の国で生まれた観音祐崇 (かんよゆうそう) 上人が 1454 年に選擇寺と名付けた。正しくは「鶏頭山西休院選擇寺 (けいずさんさいきゅういんせんちやくじ)」という。上人が初めてこの地で休んだ場所が西休院と呼ばれていたことに加えて、朝に目を覚ました時に周囲の松の木の枝に鶏がとまり鳴いていた様子から、中国で有名な鶏頭摩寺 (けいずまじ) という修行道場を思い起こし、この山号と院号を持つようになった。選擇寺は浄土宗であり、現在の本堂は昭和 5 (1930) 年に建立された鉄筋コンクリートの建造物で、平成 12 (2000) 年 2 月に登録有形文化財に登録されている。これは大正 12 (1923) 年の震災で被害を受けた本堂を昭和初期に正確にコンクリートで再現したことが評価された。本尊は平安時代後期に作られた阿弥陀立像であり、通常は阿弥陀仏、観音、勢至がお前立本尊 (平常公開されない仏像の前に身代りとして安置される仏像) として安置されている。本尊の阿弥陀如来像は等身大で厨子の中に安置されており、年に一度、お十夜法要の際に開扉され拜むことができる。(梅原 克幸)

参考文献：選擇寺ホームページ



旧生浜町役場庁舎

住所：千葉市中央区浜野町 1290-3

建立：昭和 7 (1932) 年

設計：不詳

施工：不詳

旧生浜町役場庁舎は、昭和 3 (1928) 年に生浜村が新たに生浜町 (現・千葉市) になったことに合わせて建設された町役場庁舎で、昭和 7 (1932) 年に完成した。

現在では千葉県内でも希少な昭和戦前期の庁舎建築として千葉市指定文化財に指定されている。建築は木造 2 階建のアメリカ式下見板張の外装としたコロニアル様式の流れを汲む簡素で素朴な洋風建築としてまとめられている。

一般的に左右対称形として格式を高める事例の多い戦前期の庁舎建築にあっては珍しく、車寄・玄関が正面左寄りに置かれており、素朴で可愛い姿形となっている。

左右非対称形として片側を広く採っているのは 2 階に議場を置いていたためで、ここは当時の様子そのままに残されている。1 階が町役場の執務室であったが、現在は農機具等の民具を周辺地域より寄贈を受けて展示されるなど、毎週火・木・土の各曜日だけ一般に公開され、資料館として活用されている。(藤木 竜也)

参考文献：千葉市公式ホームページ

27



日本福音ルーテル市川教会

住所：市川市市川 4-288-14

建立：昭和 30 (1955) 年

設計：ウィリアム・メレル・ヴォーリズ

施工：不詳

アメリカに生まれ育ち、建築家の道を断念してキリスト教伝道のために来日しながら、巡り巡って日本国内で生涯に渡って建築設計に携わることになったという異色の建築家がウィリアム・メレル・ヴォーリズである。昭和戦前期から戦後にかけて国内に多数・多様な建築作品を残しており、特に本作は晩年の作品にあたる。真っ白な外壁を持ち、ヴォーリズが得意としたスパニッシュ様式の流れを汲む木造 2 階建の教会堂である。

礼拝堂は切妻造の瓦型鉄板葺屋根をもち、大きな半円型のアーチ窓を設けている。また、礼拝堂及び鐘楼正面には、上部に丸窓が設けられており、全体に幾何学的な造形表現を併せ持つモダニズム建築の影響を少なからず感じさせるデザインでまとめられている。

平成 20 (2008) 年 10 月 23 日に国登録有形文化財に登録となり、平成 23 (2011) 年 10 月から平成 24 年 10 月にかけて保存修理工事を行い、より美しくなったばかりでなく、耐久性も向上した。(久喜 有乃+藤木 竜也)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ、市川市公式ホームページ

28



大多喜町役場庁舎

(現・大多喜町役場中庁舎)

住所：夷隅郡大多喜町大多喜 93

建立：昭和 34 (1959) 年

設計：今井兼次

施工：大成建設

昭和 29 (1954) 年に町村合併によって大多喜町の行政区域が新たに変わったことを機に町役場庁舎の建設計画が立ち上がり、昭和 34 (1959) 年に竣工した。設計は早稲田大学教授・今井兼次であるが、これは当時の町会議員に教え子がいたという繋がりによる。東西軸の一文字型のシンプルな形状で、鉄筋コンクリートの柱・梁のラーメン構造により、開口部を豊富に設けた透明度の高い建築であった。また、起伏の多い地形により採光が容易であることから地下に議場を置き、行政事務を 1 階に設けることで日常の来庁者にも便利のよい機能的なものとしていた。建築は純度の高いモダニズム建築を表しせしめているが、表玄関のキャノピーを構成するうねる様な意匠、要所に散りばめられたモザイク壁画や照明等の細部意匠、そして自然石を用いた手法など、今井独自の情緒豊かな建築表現が散りばめられている。平成 24 (2012) 年には北側に本庁舎 (千葉学設計) を加え、中庁舎として町役場機能を新たに作りリニューアルされた。(藤木 竜也)

参考文献：大多喜町役場 庁舎の歴史と再生

29



常盤平団地

住所：松戸市常盤平 2 ほか

建立：昭和 35 (1960) 年～

昭和 37 (1962) 年

設計：日本住宅公団

施工：不詳

戦後の東京近郊の住宅不足を緩和するために日本住宅公団 (現・都市再生機構) が川崎市生田地区、日野市日野地区と共に建設した大規模団地である。昭和 35 (1960) 年から昭和 37 (1962) 年まで段階的に入居が進められ、戸数 4839 戸の 4 階建公団住宅 170 棟に加え、ショッピングセンター、集会所、病院、小学校などの多様な施設を持つ「団地街」が形成された。

住戸の基本平面は 2DK とする。これは吉武泰水の提唱した「公営住宅標準設計 51C 型 (通称 51C 型)」を基にするもので、加えて最新設備として採り入れられたステンレス流し台、食事用テーブル、玄関扉へのシリンダー錠も併せ持った戦後日本における集合住宅の典型例であり、かつ代表的事例としてよく知られている。

団地間の隣棟間隔も広く、周囲を緑が取り巻く豊かな居住環境を実現している。現在も集合住宅として使用され続けているため、現地での内部見学は出来ないが、近隣に所在する松戸市立博物館内に昭和 37 (1962) 年当時のモデルルームが原寸大で展示されており、これは一見の価値がある。(藤木 竜也)

30



千葉大学記念講堂

(現・千葉大学いのはな記念講堂)

住所：千葉市中央区亥鼻 1-8-1

建立：昭和 39 (1964) 年

設計：楨文彦+竹中工務店設計部

施工：不詳

千葉大学医学部創立 85 周年を記念して、医学部の入る千葉大学亥鼻キャンパスに設けられた講堂である。設計は楨文彦で、名古屋大学豊田講堂に次ぐ 2 作目として、同じく竹中工務店設計部との協働により昭和 39 (1964) 年に完成している。

外観は全体を鉄筋コンクリート造打放し仕上げとし、左右に屋根スラブを吹き下ろした台形形状をしたシンボリックな造形で「鎮守の森にたつ社」のイメージでデザインされたという。

内部はホワイエとホールが空間的に連続する開放的なつくりとして、内部を特徴とし、鉄筋コンクリート造打放し仕上げが内装にも採られた装飾性の極めて少ない実直な建築である。その一方で、建物内外には彫刻家・流政之の「三恋シリーズ」と呼ばれる彫刻を備え、アクセントとしているところも興味深く映る。

平成 26 (2014) 年には耐震改修工事を完工し、耐震性やホール機能の向上が行われた。千葉県内を代表するモダニズム建築の 1 つとして、未永く愛されるものであってほしい建築である。(藤木 竜也)

参考文献：総覧日本の建築 第 2 巻

31



千葉市立郷土博物館

住所：千葉市中央区亥鼻 1-6-1

建立：昭和 42 (1967) 年

設計：不詳

施工：不詳

通称「千葉城」と親しまれている郷土博物館である。亥鼻山の高台に「築城」されており、堂々とした天守閣風の装いを持つが、躯体は鉄骨鉄筋コンクリート造である。鎌倉時代より千葉の発展に大きな役割を果たした千葉氏は高層の近世城郭を持たなかったとされ、これは戦後に観光施設として他所の天守閣を模してつくり上げられた「模造天守」ともいふべき建築である。天守閣の形式は踏襲しており、松江城と同じ正面に付櫓を付した複合式天守とし、4 層 5 階の天守閣そのものは長押形のある白漆喰塗込風とした望楼型天守の形式である。

本来はありもしない城郭をイメージでつくり上げたという史実を歪曲するかのような面に対して批判的に捉える見方も強いが、天守閣を街のランドマークとして欲する文化的欲求の顕れであり、ともあれ「城下」を見守って 50 年近くになるのである。日本人の建築観を象徴的に示す事例として、歴史的・文化的価値を見直す時期にあるといえないだろうか。(藤木 竜也)

参考文献：千葉市立郷土博物館ホームページ

32



千葉県文化会館

住所：千葉市中央区市場町 11-2

建立：昭和 42 (1967) 年

設計：大高正人

施工：戸田建設

昭和 43 (1968) 年、日本建築学会賞作品賞を受賞した作品。場所は千葉市の『亥鼻公園』と呼ばれる公園内にある。また、この地は鎌倉幕府を開いた源頼朝の重鎮・千葉氏が別館を構えた場所でもあり、千葉市発祥の地とも呼ばれる由緒ある場所。明治に千葉師範学校(後の千葉大学教育学部)が建てられるが、戦後になって亥鼻山から移転することが決まり、県はここに文化的施設を集中的に建てる事を決めた。県立中央図書館、市郷土資料館の建設と共に中心施設として千葉県文化会館が建てられ、「いのはな文化の森」と名付けられた。建物は地形を生かす形で、最も低い部分に大オーディトリウム(劇場やコンサートを行う場所で、ステージや観覧席を含めた総称)を起伏の最も低い場所に置き、そこからの傾斜に沿って客席を設けている。また、中央には高い天井を持つホワイエ(劇場などの休憩場所)があり、開放的な空間を演出している。設計に当たっては台地の自然を生かし、地形の可能性を最大限に引き出す事によって、環境との調和を図ったという。隣接する県立中央図書館も同じ設計者の作品なので、見比べてみる事をお勧めする。(岡澤 甫)

33



千葉県立中央図書館

住所：千葉市中央区市場町 11-1

建立：昭和 43（1968）年

設計：大高正人

施工：戸田建設

この図書館は『通り抜け可能な空間』を概念として計画された。公共空間である図書館を、誰でも入れる様な親しみ易い空間、街並の延長線として空間を表現した建物である。1階玄関ホールから展示室、展示室から北側玄関へ続く街の街路の様な空間の流れ、休憩室や講堂など人々の集まる場所が用意され、街のたまり場としての役割を備えている。また、骨組みなどの全ての部材を工場で生産し、現場で組み立てるプレハブ工法によって建築されている。本作では当時まだピアノ線などの鋼材を用いて、引っ張りに弱いコンクリートを強めるという、当時まだ完全に一般化されていないPC(プレストレスト・コンクリート)工法も用いられた。そしてこの工法を使用したこれだけの規模の建築は、当時の日本や世界においては前例のないもので、理論上は可能でも、実際の現場ではどのようになるか見当が付かないのである。だが、この実験的な試みが建築技術を向上させ、現在の建築技術に与えた影響は計り知れない。日本を代表する近代建築の1つとして、『DOCOMOMO JAPAN 選定日本におけるモダン・ムーブメントの建築』に選ばれている。(岡澤 甫)

34



成田山新勝寺大本堂

住所：成田市成田 1

建立：昭和 43（1968）年

設計：吉田五十八

施工：大林組

成田山新勝寺は真言宗寺院で天慶3（940）年に創建されたといわれている。本堂（不動堂）は、御本尊である不動明王を安置するためのもので、成田山においては最も重要な御護摩祈禱を行う場所である。ただ、他にも境内には江戸時代に建てられた本堂が3棟残っている。これは新しく本堂を造営した際、以前の本堂を別の堂宇として転用する事が通例となっていたためである。

真言宗の本堂は一般的に閉じて暗い空間である。しかし、この本堂は広く明るい空間を作り出している。また、境内の古建築と比べて装飾の数も少なく、本堂の内陣と外陣を仕切る欄間にブロンズの天女の透し彫りがあるのみだ。本堂の構造には鉄骨鉄筋コンクリート造が採用され、これまでの本堂の空間、装飾について新しい考えの下で設計されている。例えば、木造本堂の柱の頂部に必ずある組物や墓股（かえるまた）などが全くない。だが、離れた場所から本堂を見ると、昔の建物との違いを感じさせないものとなっている。伝統を理解し、新しさを追求した末に完成した姿だ。(岡澤 甫)

35



佐倉市庁舎

住所：佐倉市海隣寺町 97

建立：昭和 46（1971）年

設計：黒川紀章

施工：安藤建設

佐倉市庁舎は京成電鉄の佐倉駅の手前で右手の丘の上に見えてくる建物である。遠くから見ると印旛沼に出航する船のようにも見える。地上6階、地下1階からなっており、低層部はワッフルスラブ、高層部はボイドスラブとしており、この床スラブをジャッキアップして固定するリフトアップ工法を用いている。さらに議場にはHPシエルを使うなど最新技術をふんだんに用いて建てられており、これを白いカプセルの集合体のように表した外観は一世を風靡したメタポリズムの時代の作品らしいといえる。

建物は3つの棟に分かれ、機能によって建物の形や構法も変えており、3つの棟が市民ホールで結ばれるという発想で設計されている。建物の配置は丘を登り駐車場を横切って建物に入るとL字型の市民ホール、その奥が窓口棟、右は議場棟に通じ、ホールの上には執務棟がある。この建物は施工期間が敷地造成も含めて13カ月しかなかったこともあり、実験的にいくつかの施工技術が試みられている。高度成長期の技術の進歩をそのままにダイナミックな姿に表現しようとした実験的建築といえるだろう。(岩尾 海偉)

参考文献：千葉県佐倉市公式ホームページ

36



日本大学生産工学部図書館

住所：習志野市泉町 1-2-1

建立：昭和 48（1973）年

設計：大高正人

施工：竹中工務店

日本大学生産工学部図書館は総合学術情報センター及び図書館、3大学院独立研究科図書室からなり、重要文化財・重要美術品等の貴重書資料をはじめ、様々な学問分野の和洋図書・学術雑誌資料を約550万冊以上所蔵し、学生・教職員の学習や教育研究活動の支援を行っている。

建物を正面から見ると中央奥に塔状の高層書庫がそびえ、これを挟むように左右に三層の棟がある。この建物の外観で目を引くのは左右棟の三階部分の柱・梁が外に現れていることである。これは現場で打ち込む鉄骨鉄筋コンクリートを太く大きい内部の柱と梁だけとしており、あとはあらかじめ工場で作った丈夫な柱や梁をボルトでつなぎ合わせ組み立てることで吊り構造としている。このようにコンクリート構造の工夫が建築のデザイン要素となっている実例である。

建物内部は右棟の上から特別研究室、自習室、左棟は上から洋書閲覧室、雑誌閲覧室となっている。建物の一階は左右とも中二階の高さまで吹き抜け、広く明るい和書閲覧室となっている。（岩尾 海偉）

37



国立歴史民俗博物館

住所：佐倉市城内町 117

建立：昭和 55（1980）年

設計：芦原義信

施工：戸田建設、前田建設、大林組、坂田建設

1966（昭和41）年、「明治百年」記念事業の一環として設立された長年に亘って必要性が説かれてきた歴史系の国立博物館である。15年に及ぶ準備期間を経て、「考古、歴史、民俗」の3分野を展示の柱として1981（昭和56）年に開館した。

建築は佐倉城址の一画に広大な規模をもって築かれており、全体形状が低層に抑えることで城址の景観を著しく損なわないものとしている。それは外観を白色タイル貼とした箱型のヴォリュームで構成しており、一見して正面性に乏しい控えめなファサードで全体的に抑制の効いた落ち着いたたたずまいを持つことにもよく表われている。展示室は第1～6まで原始・古代、中世、近世、民俗、近代、現代と時代を追って見学できる順路となっているが、規模が大きく内容も充実しており、見学には相当の時間と労力を要することから、見たい展示室だけを選んで見られるように中央に大きく開かれたサンクンガーデンで動線を確認している。白色タイルの壁に囲まれた空に視線が抜ける静謐な空間で、閉鎖的な展示空間に比べてコントラストのある開放的な空間が演出されている。（藤木 竜也）

38



千葉ポートタワー

住所：千葉市中央区中央港 1

建立：昭和 61（1986）年

設計：日建設計

施工：竹中工務店

昭和 58（1983）年 9 月に県人口が 500 万人を突破したことを記念してつくられたモニュメントであると同時に、展望塔、海洋展示室としても計画され、千葉県民の日である昭和 61（1986）年 6 月 15 日にオープンした。

タワーは千葉ポートパークの一角にあり、眼下に千葉港、千葉市街地、東京、房総方面が一望できる。塔身は一変の長さ 15.12m の菱形の断面形状をもち、展望フロアを除くタワー全面を合計 5,571 枚の熱線反射ガラスで覆っており、建物は地上 4 階、塔屋 2 階建てで高さ 125.15m となっている。最上階にはタワー全体の揺れを打ち消す総重量 15t の「ダイナミックダンパー（動吸振器）」が設置されており、この装置の設置・採用は千葉ポートタワーに用いられたものが日本で最初のものだった。

施設の二階は「愛のプロムナード」と呼ばれ、平成 23（2011）年 4 月に恋人の聖地に認定された。フロア内には恋人の聖地認定記念のモニュメントおよび「天空縁結び」スポットがある。（岩尾 海偉）

参考文献：現代建築ガイドブック千葉市

39



幕張メッセ

住所：千葉県美浜区中瀬 2-1

建立：平成元(1989)年

設計：楨文彦

施工：清水建設、鹿島建設、竹中工務店
大林組、大成建設ほか

幕張メッセは、最寄りの海浜幕張駅から徒歩 10 分程度の位置に所在し、様々なイベントが開催されている大型の展示・会議施設である。千葉工業大学では、入学式と卒業式をここで行っており、そういう意味では馴染み深い建築といえる。

設計は楨文彦によるもので 1989 年に開館し、国際展示場および国際会議場、イベントホールの 3 つの役割を担っている。国際展示場は 1~8 ホール、9~11 ホールに分けられる。国際展示場 1~8 ホールは鉄筋コンクリート造一部鉄骨造で 54000 m²の展示スペースを有しており、可動式の間仕切りを採用することで 8 ホールの無柱空間に分割することができる。9~11 ホールも同様に可動式の間仕切りを採用しており展示室を分割して利用することが可能となっている。各施設に共通して見られるのが広大な立体トラスである。東西方向で長さ約 550m、曲率半径は約 1km と非常に特殊な構造となっている。柱を配さない大空間をどのように実現しているかという構造形式を学ぶ上では恰好の建築である。(高島 博)

参考文献：現代建築ガイドブック千葉市、楨文彦－建築空間と物質性について

40



千葉神社社殿

住所：千葉市中央区院内 1-16-1

建立：平成 2(1990)年

設計：日本建築工芸設計事務所

施工：大成建設(株)

千葉神社は、関東の代表的武士団である千葉氏一族の守護神「妙見菩薩」を祀る金剛授戒を前身とし、その信仰の中心的役割を担ってきた。代々千葉氏宗家の元服はこの寺で行われ、源頼朝や徳川家康も参拝した。江戸時代に妙見寺と改称となり、幕府の庇護の下で千葉の町の発展と共にあったが、明治時代に発令された神仏分離令により千葉神社となった。これは幾度もの大火に見舞われながらも、その度再建され、現在の千葉神社社殿は平成 2(1990)年に建立されたものである。上下 2 つの拝殿を有する日本初の重層社殿であり、絢爛豪華な朱塗りは必見だ。また、境内に所在する千葉天神社は昭和 29(1954)年に建立された旧千葉神社社殿をそのまま使用しており、その他にも境内には摂社・末社が数多く所在し、一層の格式を高めている。1,000 年近く続く妙見祭が毎年 8 月に行われ、千葉の町を御神輿で練り歩き、それを大勢の人々が見守る。地域の人に愛されながら千葉の町と古くから深い関わりを持ち、美しい社殿を持つのが千葉神社である。(梅原 克幸)

41



君津市民文化ホール

住所：君津市三直 622

建立：平成 2(1990)年

設計：丹下健三

施工：竹中工務店ほか

君津市郊外の田園風景の中に築かれた文化ホールである。建物は東西に長く、東に客席数 1200 席を誇る大ホール、西に客席数 502 席になる中ホールを置き、これを南側に構えた大きく湾曲した壁面で囲み、敷地入口と大ホール・中ホールの間を通る軸線にスロープを通して、2 階のデッキで両者を繋ぎ、その下部にギャラリーやリハーサル室を内包して建築として一体的に形成するものとしている。回遊性があり、上下階をダイナミックに繋ぐスロープによるアプローチは、建築家・丹下健三らしい空間演出である。これに加えて君津市文化ホールならではの特徴には、湾曲した大壁面の青、手すりの赤、大・中ホール壁面から突出した配管の黄、そして壁面に貼られ 30 角タイルの白と、原色により外観を鮮やかに彩っていることで、これは 1980 年代から 1990 年代初頭にかけて全国的に流行したポストモダン建築の特徴の 1 つと認められる。設計者である丹下建三の同時期の代表作には東京都庁舎があり、ガラス張りを目を引くフォルムを持つものがこの時期には多く、そうした意味で色彩で表現した事例は珍しい。本作は丹下健三のあまり知られていないポストモダンの傾向を伝える事例として注目できるものだろう。(藤木 竜也)

42



YKK 津田沼セミナーハウス

住所：習志野市津田沼 3-22-15

建立：平成 5 (1993) 年

設計：安藤忠雄

施工：不詳

YKK 津田沼セミナーハウスは千葉工業大学津田沼キャンパスから徒歩約 10 分程度の場所に位置しており、大学の徒歩圏内に所在する有名建築である。これは安藤忠雄が設計し、構造は打放しの鉄筋コンクリート造で平成 5 (1993) 年に竣工している。建てられてから 20 年以上が経つが、非常に綺麗な状態で保たれており、一見すると美術館を思わせる建築である。

社員寮のため中に入ることは禁じられているが、非常に大きなガラス窓が特徴的な作品である。ガラスから中を覗くと中庭とそれぞれを結ぶように複雑なスロープが確認できる。中庭には木々が植えられており、これは地下 1 階から伸びて吹き抜けとなっている。

安藤がコンクリートにこだわる理由は、「現場での一発勝負でしか品質を管理できない難しさ」への挑戦と「無機質なコンクリートをつかってあらゆる形と質感を表現する」という挑戦の 2 つがあるという。その挑戦から、彼の建築は同じ打ち放しのコンクリートでも 1 つ 1 つ違った表情を感じ取れるのである。(高島 惇)

参考文献：千葉の建築 HP、四代目社長のまじめな木の住まいづくり HP

43



千葉市中央区役所・ 千葉市美術館

住所：千葉市中央区中央 3-10-8

建立：平成 7 (1995) 年

設計：大谷幸夫

施工：清水建設、西松建設など

千葉市中央区役所・千葉市美術館の足下には矢部又吉の設計により、昭和 2 (1927) 年に川崎銀行千葉支店として建てられた建築がある。この建築を保存するために大谷幸夫が、鞘堂方式という旧建物自体をそのまま保存し、新たに求められる機能を満たすために新しい建物で覆いを設ける方法を用いているのが非常に特徴的である。この方法では外観はほとんど見ることができなくなるが、内部空間はそのままの形で残すことができる。

近代建築を保存するダイナミックな鞘堂方式の空間に注目されがちだが、建築自体は装飾的なポストモダンの残り香を感じることができ

る。現在は美術館と区役所の 2 つの役割を果たしており、多くの市民が訪れている。外壁だけの保存や移築保存、一旦解体した上での復元保存などと同様、このような形の保存も諸々意見のあるところと思うが、建物自体が本来の場所で、完全な形で保存されていくことが今後大切なことになっていくと考える。(高島 惇)

参考文献：千葉県教育委員会ホームページ

44



千葉市立打瀬小学校

住所：千葉市美浜区打瀬 1-3-1

建立：平成 7 (1995) 年

設計：シーラカンズ

施工：銭高組、松栄建設

街区型の住宅団地、幕張新都心住宅地区に出来た最初の小学校である。この街では打瀬小学校を含む既存 2 校の学校運営や学校空間を評価する若い夫婦が多数移住してきて、年々児童数が増加傾向にある。そのため打瀬小学校は 3 校目のオープンスクール形式の小学校として 24 教室、児童数 960 人を想定して設計計画された。オープンスクールとは学校の周りに塀や門がなく、地域の人が校内を通ることも使うことも可能な「開かれた学校」のことである。また打瀬小学校では教室、ワークスペース、中庭などをひとまとまりにした空間を低、中、高学年ごとに配置し、多様な学習形態に対応出来るようにしている。平成 18(2006)年には付帯施設として子どもルームが建てられた。美浜地区には学童保育施設が 2 件あるが、増え続ける子供に対応するため打瀬小学校にも建設された。当初与えられた 150 m²の床面積に多くの児童を収容するには無理があったため、小学校のグラウンドや隣接する公園も子どもルームの活動の場として捉え、それらに向かって開く建築として期待された。(高島 惇)

参考文献：現代建築ガイドブック千葉市、新建築 2006 06

45



ナチュラルシーム (鉄の家ギャラリー)

住所：市川市中山 3-14-14
 建立：平成 16 (2004) 年
 設計：遠藤政樹 + 池田昌弘
 施工：葛工務店

千葉工業大学の遠藤政樹教授と明治鋼業株式会社が共同開発した工業化住宅を、一般の人に触れてもらうためギャラリーとして使用されているもので「鉄(鉄)の家ギャラリー」と呼ばれている。この建築で重視されている点は、施工の汎用性や住み手の個性等が反映される、許容度の高いシステムのモデルを開発することと、その良さを示すのに適した第 1 棟目のデザインをどのようにするかということの二つの折り合い(シーム)が大切にされている。入口側の道路から見て敷地が下り斜面になっており、そこに幅 4.8m 長さ 32.8 m のコンクリートの道が斜面に浮かんでいるようなデザインの建物で、構造はスチールでできた床や屋根、それを支える 40 mm 角と細いスチール柱と 3.2 mm 厚さのスチールプレートで成り立ったとても軽やかなもの。柱とプレートは、構造的にバランスを考えればレイアウトが自由で、スチールプレートには 40 mm 厚の高性能断熱パネルなどが付けられ、防犯網戸や防犯ルーバー、夜間の熱損失のためのスライドドアもあるため、空間の自由度が高いうえ安全性や快適性も満足させたシステムの建築となっている。(藤原 雅人)

46



さくら広場

住所：習志野市芝園 1-5
 建立：平成 18 (2006) 年
 設計：安藤忠雄
 施工：日比谷アメニス

「さくら広場」は日本全国に 4 か所(千葉県習志野市、大阪府門真市、大阪府豊中市、神奈川県茅ヶ崎市)あり、設計は日本を代表する建築家・安藤忠雄が行ったパナソニック株式会社の社有地に開設されている公園である。桜の開花が代表するように、日本の国民性は四季の変化に敏感に対応し、四季折々の花の開花を心待ちにしている。だが、現在は異常気象が頻発し、地球の環境について一人ひとりが考えなければいけない問題である。安藤忠雄はこの公園を訪れた人々の感動が世界各地へ伝わり、地球環境を大切にしたいというメッセージを込め設計している。習志野市(幕張新都心)の「さくら広場」は、ソメイヨシノ 505 本を配置した桜一色の公園である。敷地は 32000 m²で、成木を植樹する事によって開園当初から見事な景色を作り出している。また、桃色一色に染まる春、夏の青々とした若葉、茜色に輝く秋、冬には幹や枝のたくましさや鑑賞することが出来る。自然との触れ合いによって都市の中で安らぎを育むことができる。また、JR 京葉線の車窓からも四季折々の景色を見ることが出来る。(岡澤 甫)

47



ホキ美術館

住所：千葉市緑区あすみが丘東 3-15
 建立：平成 22 (2010) 年
 設計：日建設計(山梨知彦)
 施工：大林組

ホキ美術館は世界でもまれな写実絵画専門美術館で、写実絵画という写真のようなリアリティのある風景画・人物画などの作品約 350 点を所蔵している。建物は曲線を連続させて構成した回廊型のギャラリーで、森に隣接した敷地という自然の一部となれる場所として自然光を展示空間へと導き入れることで森の中を散策しながら絵画を鑑賞しているような感覚を抱かせる造りになっている。絵の繊細さを壊さないように空間はシンプルなものになっていて、ギャラリーはプレーンな壁と絵画しか存在しない。壁面は目地が無く、絵はマグネットで壁面に飾がざられているため、鑑賞時の視界には目の前の絵画以外、鑑賞の妨げとなるものが入らないように考えられている。全館ほぼ LED 照明を採用しており、館内は白色と暖色の 2 種類の色温度の LED 照明を無数に混ぜあわせ、それらを調光することで画家のアトリエに近い雰囲気を作っている。また LED 照明の他、空調、排煙、スピーカーなどの器具は小型なものが使われ、天井に散りばめられた小さい穴に割り振られており、小さい照明が星空のような雰囲気を感じさせる空間となっている。(藤原 雅人)

48



toilet in nature

住所：市原市飯給 941-1

建立：平成 24 (2012) 年

設計：藤本壮介

施工：佐久間住研

『世界一大きなトイレ』と言われる小湊鉄道の飯給駅前に建設された女性専用トイレ。高さ 2m の杉の丸太 675 本を使った周囲 52.8m の堀の中に面積約 200 m² の草花が繁茂した広い庭のような空間があり、その中央に面積 2.13 m² の鉄骨造で全面ガラス張りの目隠し用のカーテンを設けた個室トイレが設置されている。また、男女兼用の多目的トイレも別に併設されている。

市原市では観光客を綺麗なトイレでおもてなしすることで観光地としての魅力を高めることを目的としてトイレの整備を積極的に実施しており、その一環として世界的に著名な建築家である藤本壮介氏に設計を依頼した。設計者・藤本壮介氏の建築の特徴は「山のような建築、雲のような建築、森のような建築」と定義されるなど、内部と外部の境界が少なく透き通っているような軽やかなもので、このトイレでもその特徴がよく表れており、日常では味わえない開放感を味わうことができる場所として話題になっている。(藤原 雅人)

参考文献：藤本壮介 建築展 - ワタリウム美術館、千葉日報ウェブなど

49



無憂樹林

住所：市川市国府台 3-10-1

建立：平成 26 (2014) 年

設計：妹島和世

施工：栄港建設、オーク建設

千葉県市川市の總寧寺境内にある永代供養墓と寺院の付属施設の計画。現代の新しい墓地の形として永代供養墓、寺院の将来像を見据えた境内のランドスケープとして建てられ、隣接する公園から境内へと続く緑豊かな周辺環境と、水平に広がる墓地へと登っていく起伏に合わせてアルミの庇を掛けている。庇の下には永代供養墓を祀る御堂とホワイエ、水道、テラスがあり、墓地へと入っていくゲートとしての意味も持たせている。将来的には永代供養墓に入れられる方が生前に交流したり、家族葬ができるようなラウンジスペースを作る計画もあり、増築にも対応できるようにいくつかの形が集まる分棟型の配置としている。屋根・柱・ブレースにアルミを用いたアルミ合金造で、庇の厚さは 12mm。インテリアのスペースと休憩等の半野外スペースを庭の中に計画するため、まわりの風景になるだけ自然にとけこむようなものづくりを考えられ、アルミは柔らかく周りの風景と光を反射する。いつ訪れても明るく、透明な風景をつくり出す建築である。(田中 拓弥)

50



流山市立おおたかの森

小・中学校 おおたかの森センター

住所：流山市市野谷 621-1

建立：平成 27 (2015) 年

設計：小嶋一浩+赤松佳珠子 /CAT

施工：大林組

つくばエクスプレスが通ずるようになったことで人口増加のある流山市に新たに誕生した小学校・中学校ならびにコミュニティセンターが一体となった建築である。校舎裏手にはオオタカの営巣するおおたかの森（正式名：市野谷の森）が広がる自然豊かな土地にあり、3階建の建築はヴォイドを複数配して、不整形に湾曲したスラブで空間が一体的にまとめられる。境界線のあやふやなコンクリートの床が水平性を強め、壁面はガラスによる際立った透明感を持つという浮遊感のある建築として形成されている。

こうしたフォルムから受ける印象は、内部にもそのまま表われており、教室 1 つ 1 つは塞がずに L 字型の壁で大らかに境界を仕切るもので、ゆるやかにかつ一体的に連なっていく空間性は既往のありふれた箱型校舎に学んだ身としては明らかに異質なものと映る。

床の存在感はまさに機能分化の象徴である。1階が特別教室・コミュニティスペース、2階が小学校、3階が主に中学校と各階で分けられ、管理機能は 2階のグラウンド側に集約する。フレキシブルな空間性の中で機能性を実現しており、シンプルな造形操作の下で豊かな建築が生み出されている。(藤木 竜也)

子バイイ！ケンチク 50 + 40

- [01]：飯高寺講堂 慶安 4 (1651) 年 / 国指定重要文化財
匝瑳市飯高 1789
- [02]：東海寺 (布施弁天) 本堂 享保 2 (1717) 年 / 県指定文化財
柏市布施 1738
- [03]：旧鴫田家住宅 享保 13 (1728) 年 / 県指定文化財
習志野市実粉 2-24-1 実粉本郷公園内
- [04]：旧大塚家住宅 江戸時代末期 / 県指定文化財
浦安市堀江 3-3-1
- [05]：旧宇田川家住宅 明治 2 (1869) 年 / 市指定文化財
浦安市堀江 3-4-8
- [06]：旧手賀教会堂 明治 14 (1881) 年改造 / 県指定文化財
柏市手賀 666-2
- [07]：旧堀田家住宅 明治 23 (1890) 年 / 国指定重要文化財
佐倉市 鐺木町 274
- [08]：旧学習院初等科正堂 明治 32 (1899) 年 / 新家孝正設計
国指定重要文化財 / 成田市大竹 1451
- [09]：千葉刑務所 明治 40 (1907) 年 / 山下敬次郎設計
千葉市若葉区貝塚町 192
- [10]：空挺館 明治 40 (1907) 年
船橋市葉円台 3-20-1 (陸上自衛隊習志野駐屯地)
- [11]：旧鉄道聯隊材料廠煉瓦建築 明治 41 (1908) 年 / 県指定文化財
千葉市稲毛区轟町 3-59-6 (千葉経済学園)
- [12]：旧川崎銀行佐倉支店 大正 7 (1918) 年 / 矢部又吉設計 / 県指定文化財
佐倉市新町 210
- [13]：銚子市公正市民館 大正 15 (1926) 年 / 堀井章設計
銚子市新生町 2-1-5
- [14]：いちかわ西洋館倶楽部 (旧渡辺家住宅) 昭和 2 (1927) 年
登録文化財 / 市川市新田 5-6-21
- [15]：旧岩崎家末廣別邸 昭和 2 (1927) 年 / 津田鑿設計 / 登録文化財
富里市七栄 650-25
- [16]：千葉県立安房南高等学校旧第一校舎 昭和 5 (1930) 年
県指定文化財 / 館山市北条 611
- [17]：法華経寺聖教殿 昭和 6 (1931) 年 / 伊東忠太設計
市川市中山 2-10-1
- [18]：茂原昇天教会 昭和 8 (1933) 年 / 登録文化財
茂原市茂原 581
- [19]：大野屋旅館 昭和 10 (1935) 年 / 登録文化財
成田市仲町 371
- [20]：千葉大学医学部本館 昭和 11 (1936) 年 / 柴垣鼎太郎設計
千葉市中央区亥鼻 1-8-1



手バイイ！ケンチク 50 + 40

- [21]：千葉高架水槽 昭和 12(1937)年 / 登録文化財
千葉市中央区矢作町 670
- [22]：栗山配水塔 昭和 12(1937)年
松戸市栗山 198
- [23]：御用醤油醸造所(御用蔵) 昭和 14(1939)年
野田市野田 110(キッコーマン食品野田工場内)
- [24]：香取市佐原伝統的建造物群保存地区
重要伝統的建造物群保存地区 / 香取市佐原
- [25]：佐倉市立下志津小学校 昭和 42(1967)年 / 原広司設計
佐倉市中志津 4-26-10
- [26]：木更津市農業協同組合本店事務所 昭和 43(1968)年 / 岡田恭平設計
木更津市長須賀 382
- [27]：日本大学工学部習志野図書館 昭和 46(1971)年 / 小林美夫設計
船橋市習志野台 7-24-1
- [28]：日本大学工学部ファラデーホール 昭和 53(1978)年
小林美夫設計 / 齋藤公男構造設計 / 船橋市習志野台 7-24-1
- [29]：東京キリスト教学園チャペル 平成元(1989)年 / 磯崎新設計
印西市内野 3-301-5(東京基督教大学内)
- [30]：APA ホテル東京ベイ幕張 平成 5(1993)年 / 丹下健三設計
千葉市美浜区ひび野 2-3
- [31]：竹中技術研究所 平成 5(1993)年 / 竹中工務店設計
印西市大塚 1-5-1
- [32]：三陽メディアフラワーミュージアム 平成 7(1995)年
A&T 建築研究所設計 / 千葉市美浜区高浜 7-2-4
- [33]：幕張ベイタウンパティオス 11 番街 平成 8(1996)年
スティーブン・ホール設計 / 千葉市美浜区打瀬 2-14
- [34]：花と緑の文化館 平成 12(2000)年 / 飯田善彦設計
印西市原山 1-12-1
- [35]：柏たなか駅 平成 16(2004)年 / 渡辺誠設計
柏市小青田字大松 274-1
- [36]：船橋アパートメント 平成 16(2004)年 / 西沢立衛設計
船橋市東船橋 4-30-9
- [37]：オーラッシュ千葉 平成 17(2005)年 / 遠藤秀平設計
千葉市稲毛区園生町稲毛区園生町 450-1
- [38]：千葉市美浜打瀬小学校 平成 18(2006)年 / 小嶋一浩 + 赤松佳珠子設計
千葉市美浜区打瀬 2-18-1
- [39]：千葉市美浜文化ホール 平成 19(2007)年 / 小泉雅生設計
千葉市美浜区真砂 5-15-2
- [40]：市原湖畔美術館 平成 25(2013)年 / 川口有子 + 鄭仁愉設計
市原市不入 75-1



22



24



25



31



33



35



39



40

子バイイ！ケコチク 50

2015.11 初版 2017.2 第2版

千葉工業大学 藤木研究室 製作

藤木竜也監修

高島惇 岩尾海偉 梅原克幸 岡澤甫 久喜有乃 斎藤令 田中拓弥 藤原雅人

